

新教育関係史料シリーズ

『玉川学園機関誌 全5誌』 総51巻

小原國芳 編輯／玉川学園出版部 刊

解題 白柳弘幸／榎木瑞生 すいせん 石橋哲成／伊藤敏子／山名 淳／米山 弘 (50音順・敬称略)

玉川学園機関誌の復刻について

昭和4(1929)年4月8日、玉川学園創立。その2ヶ月後に機関誌『学園日記』が創刊される。この時、小原國芳は42歳で成城学園長を兼任していた。成城学園に赴任後『教育問題研究』を出版(龍溪書舎から復刻済)し、玉川学園創立後に『学園日記』を出版した。小原は「私学に身を投じた当初から、「出版」と「機関誌」は私学経営に不可欠と考え、実践してきました」と後年述べた。小原の私学経営戦略の才を知る言葉であろう。

大正新教育は、教師中心の画一的授業から子ども中心の自由な教育をめざしたものであった。小原はその延長線上に立ち、「ホントの知育を成就せんがために労作教育」を主張し、研究会を開催するなどして啓蒙活動を展開。研究会へは国内はもとより朝鮮や台湾、樺太からも教員が集まり、その反響は小さ

『学園日記』は「もしか、さる方なり、小さくは学級更に、同じホントの教育のへ、僭上ではありますが、ましたなら」と述べ、小原向けの学校創立の過程^{まこと}あった。『学園日記』へはほとして、真の教育を实践また玉川学園創立後、スマーク体操のニルス・ブツわが国のスキーや体操に与のがあった。そうした経緯に詳しい。

その後、玉川教育の目玉確に打ち出すため、『学園をかえる。さらに『教育日本』と書名をかえたのは、「広く一般国民に教育について深い関心を持って貰いたい」ためであった。小原の教育実践は「大衆の子どもにも目を向け、労作中心の生活教育を主張……作業教育、労作教育は大正期の新教育運動とは異なる新しい運動として、当時の教育界に盛んに行われた」(『教科書で見る近代日本の教育』)と評価されている。

今回、玉川大学教育博物館の協力を得て、『学園日記』等、戦前の玉川学園機関誌が復刻されることになった。昭和戦前期の新教育、労作教育がどのように展開されていったのか等、新教育運動についての新しい発見が生まれることと思う。

白柳弘幸／榎木瑞生

いものではなかった。やがて、同じ計画を立てな経営なり、文庫経営なり、道を開拓しようとする、方些しでもお参考にでもなりの描く『夢の学校』実現にの記録を残すためのものでば毎号「少年たちに告ぐ」する熱い思いを述べている。キーのシュナイダー、デンクー一行を招聘するなどし、えた影響は計り知れないも今回、復刻の『学園日記』

としての労作教育をより明日記労作教育研究』と書名

『学園日記』の生れましたわけ

同人はじめ、少年たちの甲斐(しい働きぶり)を見ますと私はホントにはいえずには居れませぬ。今度こそは、何だかホントに近いものが生れるのではないかと胸がぞくぞくいたします。これ、私も安心して死ねさうです。あかばか長生きも出さうです。根柢り働きます。このうれしい昨今の出来事を何だか、自己廣告のやうですけれども、記録してさうなうたてなまりませぬ。成城学園の開拓で血のじみ出るやうな苦しみはいたしましたが、いづれその中、暇を得て、ゼミ記録にしてみたいですが、もしか、やがて、同じ計画を立ててみる方なり、小さくは学級経営なり、文庫経営なり、更に、同じホントの教育の道を開拓しようとする、方々へ、僭上ではあります。些しでも参考にでもなりましたら、何よりの幸と思ひますので、この『学園日記』は生れました。

それに、常に私共を愛撫鞭撻して下さいます。進歩や學友たちの論議や體験談をも合せて頂いて、出来だけ、よいものを生みみたいと念願して居ります。

小原國芳

※学園日記第1号より

日本の「新教育」を読み解く鍵の在り処

京都大学大学院教育学研究科准教授 山名 淳

小原國芳は、自らの教育理想である「全人教育」の実現に向けて、二つの大きな仕掛けをつくりだした。一つは「教師が経営する田園都市」に組み込まれた広大な学園キャンパスという物理空間上の仕掛けであり、もう一つは教育に関する書物を公にするための出版組織という言説空間上の仕掛けである。『学園日記』をはじめとする玉川学園機関誌は、この言説空間上の仕掛けにおいて生み出された出版物の中核をなしている。

玉川学園機関誌を開くとき、読者はそこに躍動する言葉と知恵比べをすることになるのではないだろうか。記事の多くは、小原の「田園都市」と学園における出来事について、当時の息づかいまでもが聞こえてきそうなほどに臨場感あふれるタッチで伝えてくれる。その一方で、そうした言葉こそが、人びとを小原の壮大なプロジェクトに惹きつけ、その実現へと突き動かしていく力そのものでもあった。どこまでが事実の記述で、どこからが鼓舞する語りなのか。双方が入り交じる小原の不思議な言説空間における実践は、物理空間上の実践とのあいだで力動的な相互作用を生み出していった。

小原は、「新教育」の物語を紡ぐための舞台を多摩丘陵に創り出し、時代の変化とともにその物語を変容させていった。「全人教育」を統制理念として突き果てぬ夢を見続けたこの教育者は、語る者であると同時に語られる者でもあった。この労多き役を演じ切り、日本における「新教育」に輪郭を与えると同時に、自らもまたその構成要素となり、そして伝説となった。そのようなことはいかにして可能であったのか。その答えを探し出すための鍵が、玉川学園機関誌に隠されていると私は思う。

小宇宙と大宇宙の交差点

三重大学教育学部教授 伊藤敏子

このたび「玉川学園機関誌」が龍溪書舎から刊行の運びとなりましたこと、玉川学園の教育実践、小原國芳の教育思想、あるいは新教育運動の展開に関心を寄せる人々にとって大きな朗報であると受けとめています。

大正自由教育の嚆矢と目される成城学園から分岐するかたちで1929年に創設された玉川学園は、教育の理論および実践に関わるネットワークづくりに熱意を注いだ創設者小原國芳の招聘活動や講演活動を通じ、創設当初から国内にとどまらず国外においても注目されている教育施設です。玉川学園の創設に先立ち成城小学校の若き主事として、さらに成城高等学校（七年制）の校長として大正自由教育の黎明期に立ち会った小原は、多くの大正自由教育の担い手がすでに久しく退場した戦後も玉川学園の長として息長く大正自由教育の精神を伝え続けます。

小原が関わった大正自由教育は同時代の教育者たちが「新教育」の名のもとに世界規模で展開した教育改革運動の一端をなします。小原の「新教育」の実現の場である玉川学園から出版された機関誌は、ひとつには1921年の「八大教育主張」で脚光を浴び今日にいたるまで玉川学園の教育理念を貫いている全人教育をその時代その時代の教育現実に照らし合わせて包括的に提案する場であり、またひとつには全人教育という教育理念に共鳴する人々にその理想に向かう活動を展開する道標として玉川学園の日常を具体的に提示する場であり、さらには国内外の「新教育」の理論および実践について最新情報を広く提供する場として機能します。

教育の構想を支えるふたつの宇宙－小原が開墾から手掛けた「新教育」の実践の舞台である玉川の丘という小宇宙と小原が国境を超えて構築した「新教育」を志向する人々の国際ネットワークという大宇宙－を取り結ぶというその特性は、「玉川学園機関誌」を教育上の文献として比類ない存在にしています。教育の過去・現在・未来と真摯に向き合う人々にぜひ一読をお勧めしたいと思います。

推薦します！ 教育の各種機関誌の復刻版出版について

元鎌倉女子大学教授 米山 弘

この度、龍溪書舎から貴重な教育機関誌の各種バックナンバーの復刻版が刊行されますとのこと。この出版に、私は諸手を挙げて心から歓迎したいと思います。それは大正時代から戦前の昭和時代まで、激動する日本の政治・経済・文化社会の中にあつて、新しい教育理想の実験的試みが志のある熱心な教師たちによって純粹に行われた事実が、機関誌のどの頁からも迫真性を以て読者諸氏に迫ってくるからです。この各種機関誌の全てを責任編集し、その成果を以て実験学校発展の大きな資力の一つとしつつ八面六臂の教育活動に邁進した人物こそは、玉川学園の創立者小原國芳（1887～1977）その人でありました。

機関誌『イデア』誌では時代を啓蒙する教育と文化を提示し、『学園日記』では新学校の理想を語り、その理想の学園作りの日々を記し、更に『学園日記労作教育研究』では、学園の具体的な教育方法、すなわち「全人教育」の方法を「労作教育」とし、具体的な「研究」の成果を機関誌を通じて世の中に公表しました。それは全人教育を実践する「玉川学園」の存在を知らしめ、忌憚のない評価も得る場ともなりました。『女性日本』や『教育日本』は、当時の日本社会の女性や教師の教養・教育・文化性の程度の貧困や問題状況に一石を投げようと、敢えて時代の情報誌として発刊したものでした。従って、教育機関誌のどのシリーズも学校と教育の時代を反映し、教育理想実現のドラマの展開といえるものであり、今日の教育界にも通ずる新鮮な教育的感覚を覚醒するものであります。

以上から私は、ここに是非とも、この各教育機関誌のシリーズを、ご推薦申し上げる次第です。

日本の新教育運動研究のための大切な資料

玉川大学名誉教授 石橋哲成

成城学園から出版された『教育問題研究』および『教育問題研究・全人』（大正9年4月～昭和8年9月）が、龍溪書舎より復刻版として世に出されたのは、昭和63（1988）年のことであった。あれから4分の1世紀が経過して、この度玉川学園の草創期に出版された『学園日記』、『女性日本』、『教育日本』ならびに『全人』が復刻されることになった。

思えば、沢柳政太郎博士に招かれて、小原國芳が広島高等師範学校（現、広島大学）附属小学校の理事（教務主任）から、成城小学校2代目の主事として成城入りしたのは大正8年のことであったが、その翌年の4月、小原國芳は成城小学校内に教育問題研究会を発足させ、『教育問題研究』を創刊せしめた。

成城小学校はその後、関東大震災を契機に新宿の牛込原町より北多摩郡砧村（現、世田谷区成城町）へと移転して発展を続けた。昭和4年、小原國芳は成城教育の補完を期して玉川学園を創立。昭和8年の成城事件を機に成城学園を去って、玉川学園の教育に専念することになった。成城学園の『教育問題研究・全人』と一時期重複することになるが、この度復刻される『学園日記』、『女性日本』、『教育日本』、『全人』は、小原國芳にとっては成城時代の『教育問題研究・全人』の延長線上にあったものと思われる。

『学園日記』の第一号において小原國芳は「成城学園の開拓でも血のにじみ出るやうな苦しみをいたしました、いづれその中、暇を得て、ゼヒ記録しておきたいですが、もしか、やがて、同じ計画を立てなさる方なり、……同じホントの教育の道を開拓しようとする方々へ、僭越ではありますが、些しでもお参考にもなりましたら、何よりの幸いと思っておりますので、この『学園日記』は生まれました」と書いている。

これらの教育雑誌が、単に玉川教育の研究のみならず、成城から玉川へと展開する日本新教育運動研究のための大切な資料であることは言うまでもない。これらの雑誌が復刻されることによって、多くの人の手に届きやすく、読みやすくなることを喜びたい。

『玉川学園機関誌 全5誌』 総51巻

＝刊行概要＝

配本	原資料名	原本号数		本体価 (税抜)
		ISBN	巻号および巻数	
1	『学園日記』	第1号 (昭和4年6月20日) ~ 第16号 (昭和5年11月1日) 978-4-8447-0283-2	第16号 (昭和5年11月1日) ~ 第17号 (昭和5年12月8日) vol. 1~vol. 4 全4巻	100,000円
2		第17号 (昭和5年12月8日) ~ 第31号 (昭和7年2月10日) 978-4-8447-0284-9	第31号 (昭和7年2月10日) ~ 第32号 (昭和7年3月1日) vol. 5~vol. 8 全4巻	100,000円
3	『学園日記 労作教育研究』	第32号 (昭和7年3月1日) ~ 第44号 (昭和8年3月10日) 978-4-8447-0285-6	第44号 (昭和8年3月10日) ~ 第45号 (昭和8年4月25日) vol. 9~vol. 12 全4巻	100,000円
4		第45号 (昭和8年4月25日) ~ 第53号 (昭和8年12月20日) 978-4-8447-0286-3	第53号 (昭和8年12月20日) ~ 第55号 (昭和12年6月1日) vol. 13~vol. 15 全3巻	75,000円
5	『女性日本』	第1号 (昭和7年5月1日) ~ 第19号 (昭和8年12月10日) 978-4-8447-0287-0	第19号 (昭和8年12月10日) ~ 第22号 (昭和9年5月1日) vol. 16~vol. 19 全4巻	100,000円
6		第22号 (昭和9年5月1日) ~ 第36号 (昭和10年8月1日) 978-4-8447-0288-7	第36号 (昭和10年8月1日) ~ 第37号 (昭和10年9月15日) vol. 20~vol. 23 全4巻	100,000円
7		第37号 (昭和10年9月15日) ~ 第55号 (昭和12年6月1日) 978-4-8447-0289-4	第55号 (昭和12年6月1日) ~ 第56号 (昭和12年7月10日) vol. 24~vol. 27 全4巻	100,000円
8		第56号 (昭和12年7月10日) ~ 第72号 (昭和13年12月1日) 978-4-8447-0290-0	第72号 (昭和13年12月1日) ~ 第73号 (昭和14年1月1日) vol. 28~vol. 30 全3巻	75,000円
9	『教育日本』	第55号 (昭和9年6月15日) ~ 第70号 (昭和11年4月23日) 978-4-8447-0291-7	第70号 (昭和11年4月23日) ~ 第71号 (昭和11年5月24日) vol. 31~vol. 34 全4巻	100,000円
10		第71号 (昭和11年5月24日) ~ 第86号 (昭和13年8月20日) 978-4-8447-0292-4	第86号 (昭和13年8月20日) ~ 第87号 (昭和14年1月1日) vol. 35~vol. 38 全4巻	100,000円
11	『全人』	第73号 (昭和14年1月1日) ~ 第88号 (昭和15年4月10日) 978-4-8447-0293-1	第88号 (昭和15年4月10日) ~ 第89号 (昭和15年5月1日) vol. 39~vol. 42 全4巻	100,000円
12		第89号 (昭和15年5月1日) ~ 第106号 (昭和16年11月10日) 978-4-8447-0294-8	第106号 (昭和16年11月10日) ~ 第107号 (昭和16年12月1日) vol. 43~vol. 46 全4巻	100,000円
13		第107号 (昭和16年12月1日) ~ 第137号 (昭和19年6月1日) 978-4-8447-0295-5	第137号 (昭和19年6月1日) ~ 第138号 (昭和19年6月1日) vol. 47~vol. 51 全5巻	125,000円

※『女性日本』第20~21号は休刊のため収録されていません。

残僅少 成城学園教育研究所 編／北村和夫 解題
教育問題研究 全58巻・附1巻
揃本体価 994,000円

大正6年に澤柳政太郎によって創設された成城学園は、「個性尊重の教育」「自然に親しむ教育」「心情の教育」「科学的研究を基とする教育」を基本理念とし、その実践結果を「教育問題研究」に記した。
大正から昭和初期の全国教育界に多大な影響を与えた新教育論を垣間見る貴重な史料。

配本	原本発行年月	原本巻号	冊数	分冊本体価	ISBN
1	大正9年4月~大正13年9月	教育問題研究1号~同54号	14	238,000円	978-4-8447-8585-9
2	大正13年10月~昭和3年3月	教育問題研究55号~同96号	14	238,000円	978-4-8447-8586-6
3	大正15年8月~昭和5年6月	全人1号~同20号 教育問題研究全人21号~同47号	15	255,000円	978-4-8447-8587-3
4	昭和5年7月~昭和8年9月 総目次・執筆索引	教育問題研究全人48号~同87号	16	263,000円	978-4-8447-8588-0



龍溪書舎

〒179-0085 東京都練馬区早宮2-2-17 <http://www.ryuukei.co.jp>
TEL 03(5920)5222 FAX 03(5920)5227